

氷風のクルッカ

雪の妖精と白い死神

柳内たくみ Takumi Yanai



アルファボリス文庫

この物語はフィクションです。
実際に起きた出来事や実在した人物をモチーフとしていますが、
歴史的事実とは異なっております。

† 白魔の戦場

その大地は、「白」^{バルコイネン}によって覆い尽くされていた。

湿原が、沼が、道路の全てが雪に覆われ、丘や平原は荒天にうねる白い海原が一瞬にして凍り付いたような姿となっている。

冬の女王はその伴侶を迎えるために、氷と雪とでその身を飾る。樹氷の森は彼女の神殿、不用意に踏み込む者を死の彷徨^{ほうこう}へと誘う白魔の迷宮だ。静寂を好む冬の女王は、騒がしい不埒者^{ふちやう}を許さない。極寒の息吹^{いきふい}で行く手を阻み、この大地を押し通ろうとする者の気力と体力、そして命の炎までをも吹き消そうとする。

処女雪の表面に残されるのは東から西へと向かう足跡のみ。何を求めて進んだのか、彼らの足跡は西に進むほどにその数を減らし、やがて途絶える。どこにも行き着けなかった彼らは、柔らかな雪の下で永遠に眠ることとなるのだ。

短い昼が終わわり、やがて長い夜が訪れる。

分厚い雲に覆われた空には星も、月もない。白かった世界の全てが夜の帳^{とばり}に覆われ、暗黒色によって塗りつぶされる。すると動物達は息を潜める。暗黒の魔王と冬の女王の

逢瀬を邪魔することのないように。その恐怖をやり過ごそうとするかのように。

だが、そんな中で閃光が瞬いた。コッラーの森は、冬の女王も暗黒の魔王も恐れない兵士達の戦場であった。銃口から放たれるマズルフラッシュが、闇を一瞬だけ引き裂き、周囲が白魔の森であることを思い出させる。

瞬く白、瞬く黒とが激しく入れ替わる。銃声が雷鳴の如く響き渡る。

「くっ！ 弾が」

クルッカ・サムライネンは素早くネジを緩めると、モシン・ナガンM一八九一／三〇から照準眼鏡を取り除いて槓桿を引き、五発の弾丸を束ねた挿弾子を押し当てて装弾する。

すぐさま片膝について据銃し、照星と照門と、そして白い雪中用偽装服で身を固めた敵とを重ね合わせようとする。

だが、激しく動揺する身体、爆発しそうな心臓、そして恐怖に震える腕がなかなかそれを許してくれない。逃げる敵を銃口で追いつながら祈る。

はやくはやくはやく！ 照準よ合つて。

秒にしてコンマ以下の時の流れが、生死を分ける。

ああっ、もうっ！

闇の中にうつすらと浮かぶ彼女の敵は、木の幹の向こう側に姿を消した。わずかに遅

れて放ったクルッカの弾丸は、木の幹にすら当たらない。これがシモ・ヘイヘだったら、と彼女は思う。彼ならばこんな敵はいとも容易く片付けているに違いない。だが彼女はヘイヘではなかった。

「ひっ！」

空気を切り裂く弾丸がクルッカの耳元を掠めた。今度はクルッカが雪を蹴って逃げる番である。重い足を賢明に動かしてジグザグに走り、立木の陰へと飛び込む。

「きゃははははは！ 見てよかーさん、こいつド素人だよ！」

瞬く閃光に浮かぶ敵の影は二つあった。

一人は戦闘の高揚感に笑い、叫び、逃げるクルッカを脅かすように囁き立てる。

一人は冷静で沈着だ。獲物の気配に耳をそばだて、確実にゆつくりと追い詰めようとしてくる。

「ちよっと腕が立つからって、『雪の妖精』なんて名を貰って調子に乗っちゃってさあ、おしおきが必要だと思わない？」

「照明弾を使うよ、ミーシャ！ 準備おし」

冷静な方が、落ち着いた口調で夜空に小さな筒先を向けた。

「はいな。かーさん」

灯火が打ち上げられる。青白い閃光が広がり、白魔の森は輝ける白い雪とその影が作る漆黒のコントラストで埋め尽くされた。樹木の作る影が、風に煽られる小麦のように一斉になびいていく。光源が、ゆっくりとその位置を下げてくるせいだ。だが全ての影が同じ方向へと傾いていく中で、一つだけ異なる方向に動いていく影があった。

「みつけた！」

「まずっ！」

クルツカの肌が総毛立つ。照明弾の輝きを全身に浴びていたのだ。慌てて身体を雪の中に投じる。

クルツカを掠めた銃弾が木の幹を抉る。ただ抉るばかりでなく、炸裂して大鋸屑をまき散らしながら、樹木をねじきるような音とともに引き倒した。

逃げ惑う動物のようにクルツカはその陰から這い出して、森の向こうへと飛び退いた。

「どっちに逃げたー!?」

「そっちだよ。そっちの奥の方さね！」

やがて照明弾が雪原に落着する。周囲の雪をその熱で溶かし、雪面の下へと潜り込んでいく。

クルツカは夜の帳に隠れるように、その裾の下へ飛び込んだ。

「自分から『雪の妖精』だなんて名乗ったわけじゃないのに！」

なんでお仕置きされなきゃなんないのよ、と苦情を呟く。

「こいつら頭おかしいんじゃない？」

特にミーシャとか言う若い方は、常軌を逸した凶暴性を少しも隠そうとしない。そのため動きが少しも読めないのだ。クルツカの恐怖を煽るためにわざとそうしているのなら相当の策士である。実際、クルツカは恐怖に捕らわれ、逃げるのに精一杯となっているのだから。

樹木にしがみつくように隠れ、息が整うと雪を蹴って、藻掻くように走る。だがそんな繰り返しの途中で二人組の敵は、獲物を追い立てる猟師のように確実に距離を詰めて来ていた。

あいつら並の腕じゃない！

こんな敵に挑もうとした自分が、馬鹿だったのかも知れない。自分は圧倒的に力が足りない。弱い。弱過ぎるのだ。だが、いくら後悔を積み上げても許してもらえないはずはない。これまでに多くの敵を殺してきたし、なにしろこれは戦争なのだ。

照明弾の残照が尽きて森は再び闇に閉ざされる。途端に周りに何があるか見えなくなった。

そこに付け入るような銃弾が飛んできて、遮蔽物にしていた木の幹が弾ける。

「あつっ！」

破片がクルツカの身体を掠め、肌に食い込む。クルツカは手探りで這うようにして森を無様に逃げ惑う。

見栄も外聞も、全てをかなぐり捨てて、一メートルでも、一センチでも敵から遠ざかるよう、這いつくばった。

「当たったかな？ どう思う？ かーさん」

「無事でいてくれた方がウチとしちゃ嬉しいね。簡単にくたばられちゃ、楽しみ甲斐がないからね。もうちょつと逃げ回つてもらわないと」

静かな森の中、雪を踏みしめる足音と、彼女を嘲弄する声^{やうやう}が迫って来る。屈辱と恐怖に奥歯が擦れ合つて鳴る。

「どこかな？」

「どこに隠れてるのさ？ 出ておいでよ。隠れてたんじゃ、面白くないだろ？」

敵が雪を踏む音が聞こえるなら、こちらの這う音も敵に聞こえるだろう。もう一步も動けなかった。足が竦んで力が入らなかった。

「虐めないから出ておいで」

「そうそう！ 手足を撃つていたぶつてから、その顔にめちゃくちゃ弾を撃ち込んであげるよ。あの時の坊やみたいになさ。くすくすくすくす！」

クルツカは悲鳴を上げなくなるのを懸命に堪えながら、喘ぐ息が敵に聞こえるのを防ぐために口を手で覆った。

見つかりませんように、見つかりませんように――。

恐怖と寒さで震えながら、雪の中に身を横たえてじつと堪えた。

† 雪の妖精は、何故銃を手にしたのか

クルツカ・サムライネンには自慢出来ることがいくつもあるが、その一つは長い白銀の髪だった。

磨いた銀器のように輝く髪をたなびかせ、スキーを履いて白い雪の中を駆け抜ける彼女の姿は、まるで雪の妖精だと無口な祖父が褒めたほどである。

彼女の祖父は獵師で、彼女をよく狩獵に連れて行ってくれた。

祖父は散弾銃を用いず、一発の銃弾で毛綿鴨^{けわたかも}を打ち落とす技量を持っていた。彼女は祖父の腕前をこのサーミ地方、いやスオミ共和国全域に広げても、右に並ぶ者はいないはずだと自慢に思っていた。毛綿鴨はその名が示すように、その羽毛に価値がある。商

品価値を落とすことなく射落とすには、鴨の頭部を狙うしかない。飛んでいけば素早く、地にいけば右に左にとよく動き回る鴨の小さな頭部が的だ。それを臆病な鳥達が気づかないような遠方からの中させるというのだから、どれほどの技術かが想像出来るだろう。

だが、彼女の祖父は言った。

「儂を思い上げらせてはいかんぞクルツカ。この程度のこと、スオミの……ましてや儂らサーミの獵師ならば普通なんだ」

サーミの獵師とは、皆そのような男達なのかとクルツカは素直に驚いた。と同時に、祖父の謙虚過ぎる態度をもどかしく感じていることを、唇を尖らすという方法で表した。

「お前はやっぱり雪の妖精じやな。冬の女王の眷属だ」

「冬の女王さま？」

「そうじゃ……冬の女王は、自信家や腕自慢が大好きなんじゃ。男を唆し煽り立てては無謀な挑戦へと駆り立てる。その妖しい魅力に唆された何人もの男が、女王の国へと招かれていった。お前の父親のようにな」

クルツカは、祖父の憤りにも似た感情がどうして自分に向けられているのか分からず狼狽えた。それを見た祖父は優しい声色に立ち戻ってクルツカにわびる。

「幼いお前に言うようなことではなかったな。済まん」

クルツカは幼かったが、祖父がやるせない気持ちを抱えていることは感じ取れたので、

傷ついたことを水に流してやることにした。

「ねえ、おじいちゃん。お父さんは女王さまのところにいるの？」

「ああ。きつと多分、いるじやろう。案外、妖精の住まう国で楽しくやつとるかもしれないな」

苦笑する祖父の言葉にクルツカは「そうなんだ……」と肯いた。そして祖父と自分とを蝕む寂寥感を解決するための名案を披露した。

「ねえねえおじいちゃん。あたしに、てつぼうのうち方を教えて」

「何故こんなものをいじりたがる？ 女の子なら女の子らしく、人形でも勉強^{ねだ}つていれば良からう。なんなら今度買つて来てやるぞ」

「ううん、人形なんていらないわ。それよりもてつぼうなのよ。てつぼうの名手になって自慢していれば、冬の女王さまからお前こっちに来なさいって声がかかるんでしょ？ そうしたらお父さんに会わせてくださいってお願いできるもの」

「そんな必要はない！ そんなのはお前の母親で充分だ！」

父親がいなくなるとほどなく姿を消した母親について、祖父はクルツカに「父親を探しに行ったんじゃない」と説明していた。

「あたしも行くわ。お父さんとお母さんを連れ戻して来るのよ」

「その必要はない。父さんのことは、母さんに任せておきなさい。あの女なら上手くや

るじやろうて。殺したって死なないような女じゃったからな、心配など必要ない」

初めて聞いたとばかりにクルツカは碧い瞳を輝かせた。

「お母さんってそんなにすごい人だったの？」

「ああ。お前の母親は、雪の女王そのものと思うような、しょうわる……いやいやいや、女傑じゃったんじゃないよ」

クルツカの母親はサーミ人ではなかったが、夫と組んで狩りに出るとサーミの獵師を唸らせるほどの腕前を^{示し}、様々な獲物を仕留めて来たと祖父は語った。二人の手にかかる^{へらじか}と毛綿鴨は当然、^鹿、トナカイなど実に様々な動物が獲物となったという。

「腕が良過ぎて獲物を獲り過ぎてしまうくらいじゃったんじゃない」

「決めた。あたしもお母さんのようになる」

「いかん！ ああなつては絶対に駄目じゃー」

「どうしてよ!?」

寡黙な祖父は「まだ、お前には早い！」と鼻白むと、それ以上は母親がどんな人であったかを決して語ってくれなくなってしまったのである。だが、その代わりとばかりに銃を習いたいという希望については叶えてくれた。祖父の目が届く場所でしか銃を手にしない、サーミの神々にそう誓わせた上で銃の練習を許可してくれたのである。

血筋なのか、それとも良き指導者に恵まれたためか、クルツカはやがて銃の名手となっ

た。

祖父と共に獵に出れば、^鹿や鴨を次々と仕留めた。

「おじいちゃんがサーミ地方で一番。あたしが二番だ！」

美しく成長したクルツカは、そう言つて自慢するようになった。幼いあの時に心に決めたように、冬の女王からの迎えが来やすくなるよう、あえて周囲の腕自慢と競い合い、それに勝つて、誇る態度をとり続けたのである。もちろん周囲から少しばかり変わっている生意気な娘だと見なされてしまうことは承知の上であった。他の女の子が、花や刺繍や恋の話に興じているのを傍目に、男の子に交ざつて獵や射撃の技を競っているのだから、それは仕方のないことであろう。

だからすぐにこんな風に言われることとなった。

「クルツカって男の子みたい」

「威張りんぼうよね」

他の女の子は、男子のような彼女を見て陰口をたたいた。そこには性の別が様々な形で表面化し始める年頃にあつて、男という種族と対等に渡り合う彼女への反発と羨望の成分が含まれていた。さらにクルツカは、整った容姿と美しい髪を持っていたから余計に周囲からの嫉妬を招いたのだ。

幼い頃の決心は、大きくなつてもその思考や行動に深い影響を残す物である。クルツ

力は本当は繊細で傷つきやすい自分を隠して、勝ち気な性格を演じ抜き、ほんの少しばかりの理解者と大多数の敵対者に囲まれて育っていったのである。

美しく成長したクルツカは、鏡を前にして自分の姿をじつと睨んでいた。

長い白銀の髪は、彼女の自慢だ。祖父に褒められ、親友から称えられたこの髪を、邪魔だと感じたのはこれが初めてだった。髪を惜しむように梳りながら、鏡に映る自分の姿を睨みつけると、そこには十七歳となった美少女がこちらを見つめていた。

自分で言うのもなんだが、どの角度から見ても綺麗である。切れ長の眉、長い睫、二重の瞼、細くすつきりとしたおとがい、淡いピンクに染まる頬に、さくらんぼのような唇。これならば、微笑み一つで男という種族を魅了することも可能はずだ。今ならば、祖父が「雪の妖精、冬の女王の眷属」と自分に向けて言い放った意味も理解出来る。それだけに男に化けようとするからには、せめて外見だけでも「らしく」する必要があるのだ。

五年ほど前から膨らみ始め、綺麗な曲線を描いて隆起した胸は、二裂包帯をぎゅつと強く巻きつけて押さえ込む。ウェストの細さや腰回りのなめらかさは厚着をすれば何とか誤魔化せるだろう。だがこの髪だけは、長いままではダメなのだ。

かつて祖父と共に獲物を追って白海^{はっかい}沿いに進んでいた時、風に乗って聞くも恐ろしい悲鳴と、苦悶の叫びがクルツカの耳に流れ込んできたことがあった。

少女は寒さとは別の理由で身を震わせながら、尋ねた。

「お、おじいちゃん、あれは何？ あそこは地獄なの？」

クルツカが指を差した白海の方角には、ニューヴオスト連邦^{リョウホク}の政府が作った灰色の建物が見えた。クルツカの耳に聞こえるこの叫びはそこから聞こえて来るようであった。クルツカが、その身に宿る才能を示した瞬間である。

祖父はクルツカが、常人には見えないものを見、常人には聞こえないものを聞くノアイデ（霊媒師）の素質を備えていることに気づくと、しばしの間瞳^{どうもく}目していた。だが、その才が孫娘に最初にもたらしたものがこのようなものであったことにはがっかりしたのか、詰まらなさそうに鼻を鳴らした。

「ヴェナヤの奴らが言うには、あそこは働く者の楽園だそうだ」

「だってらどうしてあんな苦しそうな悲鳴が聞こえて来るの？」

「クルツカ、よく覚えておきなさい。言うこととやっていることが全く逆の人間がこの世にはいるのだ。幸せをあげるなど不可能な約束で夢を見させておき、実は苦しみが与えない嘘つきがこの世には大勢いるのだ。そんな人間を見分ける智慧を身につけなさい」

クルツカは不安になった。そのような智慧を持つことが自分に出来るのか、さっぱり自信がなかったからだ。

「簡単だ。その手の連中は、大抵他人にしてはいけませんと言いながら、自分だけは何を行う。いろんな理由をつけてな。奴らはそういう嘘に長けてるのだ。だから言葉ではなく行いを見れば自ずとわかってくる」

「それって、あたしに蜂蜜をなめてはいけませんって言っておいて、自分だけ隠れてなめてたお婆さまみたいな人のこと？」

これには祖父も困ったような表情をした。クルツカの言い様を認めると、大抵の大人がそれに当てはまってしまうのだ。

「……まあ、なんだ、その中でも程度の酷いものだと思いますい。婆さんくらいなら、まあなんだ、普通の範囲だ」

「わかったわ。でも、どうして神様はそんな人間をお作りになったのかしら」

以来、クルツカは国境の向こう側には悪魔の国があると思じた。

もちろん、成長した今はクルツカも国境の向こうがおとぎ話に出てくるような悪魔の国だとは思っていない。だが、そこから聞こえた悲鳴や苦悶の声はクルツカの耳に残っていた。つまりは、国境の向こうにあるのは地獄ではなく、人々を苦しめることを平気

でやる人間が続べる国である、その恐ろしさを再認識したのである。

祖父はいつも言っていた。

「儂はお前がノアイデとしての才があることを示した時、もつと別なところに連れて行くべきであったと後悔しているよ。お前にはもつと素晴らしいものを感じ、もつと素晴らしいものを観て欲しかったからな。だがお前は最初に恐怖を感じ取ってしまった。その感情はお前の生涯を縛るものになってしまうだろう」

そして、その危惧は現実のものとなった。その隣国が、このスオミを呑み込もうとし始めた時、クルツカは恐怖でいたたまれなくなった。だから彼女は戦うことを決めたのである。

男に化けなくても戦えると彼女の親友は言っていた。実際、兵士達が着る防寒用のセーターを編み、負傷兵の治療のために包帯を織り、工場に行つて兵器を作る手伝いをするロッタ・スヴァルト（女性国防支援員）として、伝令や兵站任務に就く道もある。防空用の聴音手が不足していると言って、カンテレ（スオミの民族楽器の一つ）を奏でることと秀で、絶対音感を有する友人はこれに志願していった。

確かに、戦いのために役立つことは、全てが戦いだ。だが、クルツカは直接銃を手にとって戦いたかった。何よりも彼女の特技は射撃だったからである。

彼女の腕前は、二百メートル先の毛綿鴨を一発で仕留めることが出来るまでに上がった。

ていた。祖父亡き今、サーミでの一番はクルツカだ。そして、サーミで一番ということは、このスオミで一番ということでもある。ならばその自分は戦場で戦う義務がある。セーターを編むことも、包帯を巻くことも上手に出来ない以上、彼女に出来ることはその銃の技量で傍若無人な『ヴェナヤ兵共』に、誰に喧嘩を売ったか教えてやることだ。そして、連中を国境の向こう側へと追いつ返すのだ。

「髪は、また伸ばせるのよね」

クルツカは意を決し、鏡台に置いた鉈はさみに手を伸ばした。

じより……という感触と音が、彼女の魂に深く、深く刻み込まれた。

切り落とされた髪の手を見るのが、悔しくもあり、同時に誇らしくもあった。

*

*

「クルツク・サムライネン。十七歳で間違いないな」

クルツカは出来るだけ声が低くなるよう、女と気づかれまいとしてお腹に力を入れて「はい、クルツク・サムライネン、十七歳で間違いありません」と答えた。

スオミ共和国の徴兵年齢は十七歳だ。兵役期間は三百五十日間。そして徴兵期間終了

後も六十歳までは予備役として有事に備えるとされていた。

襟元がすうすうして妙に寒々しいので襟を立てる。刈り上げたうなじのラインは、我ながら独特の色気があるわよねえと思ったりした。

クルツカは身を乗り出すと書類を指さして訂正を要求した。

「けれど姓は、サムライネンです。アー（a）は一つだけ……」

四代前の祖先が名前の綴り間違いを強引に押し通して以来のこの姓である。いろいろなところで何度も繰り返した訂正なので手慣れたものだった。

事務官は「ああ？」と眉を寄せながらも文字を訂正した。

「よし。これを持って隣に行け」

募兵事務所の担当官は、ちらりとクルツカの姿を一瞥しただけで簡単に書類を手渡した。この瞬間に、クルツカはスオミ共和国国防軍の最下級兵士となったのだ。

思っていた以上に簡単だったので拍子抜けである。やったことと言えば出生証明書の性別と姓名の欄をちよこちよこつと削って名前を男っぽく書き換えただけ。実に簡単な作業だった。顔見知りばかりのサーミ地方ではなく、首都に近いラドガ・カレリア管区募兵事務所を選んだのも幸いした。なぜサーミ人が志願したのかと問われた時のためにいろいろと言ひ訳を考えていたのだが、その必要もなかった。もつともこの募兵事務所を見渡せば、詳しい質問をされなかった理由も明らかだ。そこは男達を国中から掻き

集めたような大混雑の中にあつたからだ。

「制服とかはどこで受け取るんですか？」

クルツカは事務官に尋ねた。だが、男はクルツカを見ることもなく、忙しそうに書類を書き込みながら言った。

「今はみんなに行き渡るほどないんだ。次の者！」

クルツカは、亡くなった祖父の服を引っ張り出して着ていた。

獵に出るにはそれで十分だったかも知れないが、戦うからには軍の制服を着たい。というより制服を着ないと、自分が兵士になった、兵士になれたのだという実感が湧かないのだ。

事務所は、集まった男達の吐く息で、噎せ返るほどに混み合っている。そんな中でクルツカは人の流れに抗い、これだけは聞かねばという感じで叫んだ。

「あの、じゃ、このまんまの格好で部隊に配属されるのかしら……いや、ですか!？」

「馬鹿、お前達訓練未了の奴をいきなり戦場に出すわけないだろう。まず基礎訓練をしてからだ。とりあえず国防軍の徽章きしょうが配られるから見える場所につけておけ。必要な物はおいおい行き渡るはずだ」

こうしてクルツカは兵士として必要最低限の訓練を受けるために、訓練キャンプへと向かう貨物列車に乗り込むこととなったのである。

十 つぎに、迷惑な隣人について

団地なり、住宅なり、隣近所との付き合いほど面倒臭いものはない。

常識を弁わえた良き人が隣人ならば、平和に穏やかな日々を送ることも出来るだろう。

だが偏屈であつたり、被害妄想の虚言癖の持ち主であつたり、はたまた傍迷惑な行為を繰り返すような者が隣人となったら、最早悲劇としか言いようがない。穏やかな暮らしは望むべくもなくなる。

もしそのような者が隣人となったら、引越しを考えるしかない。引越した先に似たような性格を持つ者がいないことを祈りながら。

だが、国家となるとそういうわけにはいかない。

引越すにも、世界の地図に空白の土地はなく、誰にも迷惑をかけずに移り住める場所など、既にどこにもないからだ。それでも移り住もうとするのなら、元から住んでいた住民をどこかに追いやって無理矢理に住み着くしかなく、そこに正義はない。無理矢理に正義を仕立て上げてても、信じてくれるのは身内ばかり。四方を敵に囲まれて永遠に心安らぐ時は来ないだろう。

つまりは自らが『困ったちゃん』になってしまふのだ。

そんな厚顔無恥なこと出来ないと思う常識人ならば、たとえ隣人が『困ったちゃん』であろうとも、忍従して暮らすしかないのである。「ああ、どうか遠くに引越したい」と歎息しながら。

そして今、悲願の独立を達成したばかりの年若い小国が、傍若無人な隣国の迷惑行為に頭を悩ませていた。

革命を成し遂げ、独裁的な支配体制の下で安定を取り戻した超大国が、革命の論理と価値観を楯にして、内乱の間に失ったかつての版図を取り戻そうと、その本性をむき出しにして来たのだ。

その要求を分かりやすく例えると、以下のようになる。

曰く、「嚴重に戸締まりするのは、俺が泥棒だと決めつけているみたいで不愉快だからやめろ。窓や扉に錠を下ろすな。錠は取り外せ！」

曰く、「壁越しの部屋の物音が気になるから、玄関と壁に面する部屋を俺に寄せ！代わりに北風は吹き込むが見晴らしの良いバルコニーをくれてやる。どうだ、気前のいい話だろう？」

はつきり言つて暴論である。ヤクザか強盗の論理としか言いようがない。今日の常識に照らし合わせれば、このような要求は通るはずがない。だが、当時の世界を支配して

いたのは弱肉強食の掟であり、強者の言い分を弱者は呑むしかなかった。でなければ、殺されて……いや、滅ぼされてしまうのだ。

現代の社会に警察があり裁判所があるように、当時のこの世界にも国際連盟という仲違いを仲裁する機関があった。だが、それらを支配するのは結局のところ、力の論理であり、小国がいくら声を束ねて抗議しても、腕力のある大国がそれを無視してしまえば、何の力にもならなかったのである。

乱暴な隣人は、手を変え品を変えて脅迫を繰り返す。平和的な交渉の姿を借りながら恥知らずにもコートの下に機関銃をちらつかせていた。近所を見渡せば、同様の脅しを受けた隣人がどんどん住処や自由を奪われつつあった。

例えばヴィロ共和国、例えばプオラ共和国。

もし、玄関に面する部屋をくれてやり、住むにも住めないバルコニーを受け取れば、とりあえず争いを避けることは出来るだろう。当面は。そう、当面の間は。しかし一旦譲つてしまえば、次は居間を寄せ、トイレを寄せ、台所を寄せと言われる。そして住む空間を狭められながらついには今夜の食事から、掃除の仕方、喋る言葉まで、すべてにおいて隣人の意志に従うことを要求されることになるのだ。

そんな生活、誰が我慢出来る？

小国の住人はそんなこと我慢出来ないと考えた。だから、要求を拒絶することを選ん

だ。そして、誰も助けたくない中で必死になって戦うことを決めた。そして自分は他の連中とは違う。たとえ敗北の運命が待ち構えているとしても、我々を相手に恥知らずで非常識な要求を押し通すには高い代償が必要だという常識を、隣人に教育する道を選んだのである。

小国の名は、スオミ共和国。独立間もない人口三百二十万人の、それほどたいした産業もない森と湖の小さな小さな国である。

そんな国が全国民をあげて、戦うための物資を国中から掻き集め、人口のほぼ一割にあたる三十万の兵士で国境の守りを固めようとしていた。

大国の名は、ニューヴォスト連邦^{リト}。一般的にはヴェナヤと呼ばれることの方が多い。人口二億を超える超大国だ。百五十万人の赤軍兵と、莫大な量の戦車と大砲を国境近くに集結させ、物資を高々と積み上げていく。指導者ジュガシヴィリが帽子を振るだけで、堰^{せき}を切ったように西に向かつて全てを呑み尽くすだろう。誰もがそう思った。

「進み過ぎて、スオミの西側に位置するルオツィ王国まで行くなよ」という冗談が、赤軍内で飛び交ったぐらいである。

「スオミみたいな小国が、ヴェナヤを相手にして勝てるわけがない」

「可哀想に」

まだ、始まったもない戦いの結末を予想した連盟諸国は、同情を寄せニューヴォスト

連邦^{リト}に対する抗議の声を上げた。だが、それはスオミにとつては何の救いにもならなかった。スオミには味方の存在が、命を賭して一緒に戦ってくれる者の登場こそが必要だったのだ。だが、負けるに決まっている戦いに手を出し、自分まで火傷する馬鹿はいない。世界の何処を探しても、他人の代わりに血を流してくれる正義の味方はない。自分が大切と思うものは、自らの手で自らの力で守らなければ守れない。それが現実なのである。スオミの首都を始めとする主要都市が、ヴェナヤ軍の空爆を受けた。

スオミ共和国の代表は国際連盟の議場でヴェナヤの行為を批難した。

だが、ヴェナヤの外務大臣スクリヤーピンは聞き直った。

「我々は、スオミの反動政治家と資本家の圧政に抑圧されているスオミの民衆を救うために、パンを送り届けているに過ぎない」

事もあろうに建物を破壊し、人々に死の惨劇をもたらす爆弾の投下を、パンの投下であると弁明したのである。

以来人々は、ヴェナヤの爆撃機を『スクリヤーピンのパン籠^{かご}』と揶揄した。そしてヴェナヤ人という存在が、理性を捨て去った野獣であることを思い知ったのである。

時是一九三九年十一月二十六日、十五時四十五分。

ヴェナヤ政府は、スオミ砲兵がマイニラ村のヴェナヤ軍陣地に向けて砲撃を行ったと一方的に言い立てて中立条約を破棄。そしてそれを理由に同月三十日に宣戦布告。国境

からヴェナヤ百万の将兵が雪崩を打つように進撃を始めた。
後に『冬戦争』と呼ばれる奇跡の戦いが幕を開けたのである。

† 第三十四歩兵連隊第二大隊第六中隊と、パン屋の親父

一九三九年十二月四日（月）。
マイナンタイ

一昨日から降り始めた雪で大地は白く染まっていた。

重苦しい灰色の空の下、クルツカ達の乗った貨物列車は重い金属のぶつかり合う音を立てながらロイモラ駅で停車した。貨車の扉が開かれて、新兵達が雪に覆われた大地にわらわらと降り立つ。

ここから東へは貨物列車は進めない。既に戦場となった地域では装甲列車が敵と戦っている。その行動を阻害するような貨物列車は邪魔なだけなのだ。

そのためクルツカ達はスキーを履いた。補給物資を載せた^{アキボ}車を皆で牽引しながら、セーターと真新しい偽装服を着込んだ新兵達は、強い風に逆らってスオ湖に向かう国道を十キロほど東へと進む。標高百八十二メートルのコツラーの丘を上り切ると、その麓に広がる南北に細長い湖が見えてくる。

「コツラー湖だ！」

クルツカ達新兵は極東の島国から送られて来た竹製のストックを雪に突き刺し、スキーを止めるとその美しい景色をしばしの間眺めた。

スオミは森と湖の国だ。二万を優に超える湖が国土のあちこちにちりばめられていて、とりわけ珍しいものではない。だが、丘の頂上から見下ろされる光景は、彼らにもどこか格別を感じられた。

スオミ——特にラドガ湖北地域の地図を見ると面白いことに気がつく。

どの川もどの湖も、全体としては概ね南北に細長い形を持っているのだ。まるで立てかけたガラスに霧吹き水をかけ、水をよく絞らない雑巾で一方方向に拭いたような感じで、概ね同じ方向へと流れているのである。

コツラー湖もその例にならって南北に長く、その南端から、雪に閉ざされた森の中を蛇行する川を南東に向けて延ばしていた。そして河口付近には、国道が東西に横切るための橋が架けられ、その南約一キロのところには鉄道のための鉄橋が架けられている。

大軍が西に向かつて進むには、この国道を用いるか鉄道を利用するしかない。そのためヴェナヤ軍はここを必ず通過する。スオミ軍はそれを阻止するために、コツラー川に架けられた国道の橋と鉄道の鉄橋の西側を半包围する形で、防御陣地を構築したのである。

それは三列の有刺鉄線と、乱石による対戦車バリケード、さらに二十メートルおいて対戦車壕あるいは傾斜壁を掘り、またさらに二十メートルほどのところに二列からなる有刺鉄線。そしてその先にスオミ軍の防御陣地が待ち構えるという重層的なものであった。

スオミ軍陣地に到着したクルツカ達補充兵が赴くようにと命じられたのは、第三十四歩兵連隊ハルトマン少佐率いる第二大隊であった。

クルツカがその中の第六中隊に配属されたのは、ただの偶然である。整列した先頭から順番に、お前は第四中隊、次は第五中隊に行け……という感じで振り分けられ、彼女が六番目だったに過ぎない。

十一月三十日の開戦と同時にスオミとの国境を突破したヴェナヤ軍は、既に二十キロほど進んで来ている。ラドガ・カレリア方面に進出してきた敵は、その第八軍。司令官はイヴァン・ハバロフである。彼は、モスクワ下にある部隊を三つに分けて以下のように展開させた。第六十八、第十八の二個狙撃兵師団はラドガ湖北岸を西進。第七十五、第三百三十九の二個狙撃兵師団はスオ湖の北を周ってトルヴァ湖方面に。そしてヒルシラ村を焼き払った後にスヴィラフディに入った第五十六狙撃兵師団を、このコツラー地方へ向けた。

スオミ軍第三十四連隊第二大隊第六中隊の兵士達は、開戦以来、直接の戦闘は避けて

つ、敵の進撃地域のインフラを破壊しながら後退する遅滞作戦に従事していた。そして昨日の内にこのコツラーの防衛線に到着して、ここに踏み留まって戦う準備を始めたのである。そのためスオミ陣地は、塹壕や、障害の増強作業のため、白い雪を被う大地のあちこちにつるはしとスコップが突き立てられていた。

指揮官が兵達にがなり立てている。

「とりあえず対戦車砲は正面に一門。北側に二門、南側に一門だ！ 固定して使うなんて余裕は我が軍にはないぞ。適宜移動させながら使うから^{えんた}掩体だけ^{こしら}拵えておくんだ！ 空っぽなのは寂しいから丸太でも置いて大砲に偽装させておけ！ 遠目で対戦車砲に見えるようになー！」

「機関銃は？」

「同じだ。敵の動きに応じて移動させられるように何力所も銃座を拵えておくんだ！」

その様子を眺めながらクルツカは首を傾げた。

「もう、すぐそこまで敵が来てるっていうのに、まだこんな作業をしているの!？」

そもそも当初の計画では、スオ湖地区に踏み留まって敵を防ぐはずであった。だが準備の遅れのため、コツラーまで下がって敵を迎え撃つこととなってしまったのだ。

この地域に用意された陣地も元々は、最初の防衛線で防ぎきれなかった時に一旦下がって敵を足止めする遅滞戦術用のものだ。敵の初撃を防ぐための設備としては充分と

は言えない。兵士が寝起きするための宿舎すら作られてないのだ。

クルツカのぼやきに仲間の新兵が答えた。

「準備はいくらやつてもやり過ぎってことはないよ？ 塹壕だってもっと深くしなきゃ」

「それはそうだけど、準備が悪過ぎない？ ヴェナヤが攻めて来るのは分かってたのに」

「分かっていたよ。だけど、ぎりぎりまで交渉で解決出来るって思ってたんだ」

「呆れた。ルツシャなんて生き物がそれほど理性的なわけじゃないじゃない。無差別に投下される『パン』のせいで何人死んだと思ってるの!？」

兵士達が作業をしている間を、新兵達はそんなことを言い合いながら縫うようにして歩き、作業の監督をしている下士官や将校達に「中隊長はどちらですか？」と尋ねてまわった。

あっちだ。いや、あそこだ、と赴く度に違う方向を指さされ、いいかげん疲れてきた頃になって、ようやく指揮官の居所を見つけることが出来た。

「申告します。セツポ・サボライネン以下十名。ただいま着任いたしました」

彼女達の前に立った中隊長は、身長約百九十センチの厳つい顔つきをした男だった。

その男は「諸君の着任を認める」と敬礼を返してから、「俺様がアールネ・エドヴァルド・ユーティライネン予備役中尉である」と自己紹介をした。

自分の中隊長が予備役と知ったクルツカは「本職の軍人じゃないんだ」とがっかりし

ていた。どうせ指揮されるならやはり職業軍人としての訓練を受け、軍人として現役で働いていた人間の方が良いという思いがあつたからだ。予備役という言葉にはどうにもパトタイム的な響きがある。教師をしていた予備役の指揮官、郵便配達をしていた予備役の下士官。そうした者を馬鹿にするつもりはないが、スオミ最強の銃手たる自分を指揮するには相応しくないような気がする。この自らを「俺様」呼ばわりするユーティライネン予備役中尉からは、パン屋の親父的な雑な印象を受けた。

豪放磊落な気性と言えば聞こえは良いが、きつと弟子の職人達を前に竈がどうの生地

の練り具合がどうのと講釈を垂れながら、カチカチの硬いパンを焼くのだ。パンならばそれでも良いのかも知れないけれど、戦争はそういう風にはいかならないと思

う。とは言え兵士となつたからには好き嫌いを言える立場ではない。この「俺様」指揮官の下で彼女は戦わなくてはならないのだ。クルツカはユーティライネン中隊長のひととなり出来るだけ早く把握して、どうしたら自分の実力を認めさせることが出来るかを考えることにした。その方が、愚痴をこぼしているよりは遥かに建設的だろうから。

ユーティライネン中隊長は、小隊長を呼び集めると補充兵達をそれぞれの指揮下に配分していった。そしてクルツカと、もう一人の年若い兵士——おそらくクルツカと似た方法で年齢を誤魔化したのであろう——セツポ少年とを「従卒」に任命すると言ひ出した。

「従卒って何？」

クルツカが小声で尋ねると、隣の少年は「そんなこと、僕に分かるわけないじゃないか!？」と口答えした。そんな会話が聞こえたのか、ユーティライネン中隊長は言った。

「従卒っていうのは俺様の、要するになんだ……つまりは雑用係だ」

「はあ？」

雑用係って何？ と思ったクルツカは生返事で肯いた。だが、少年の方は即座に理解したらしく強く感情的な反発をした。

「そんな、雑用係だなんて！」

「おいおい、気に入らないのか？ 従卒も立派な仕事だぞ。俺様が余計なことをしないで済むようにお前達が雑用をこなす。カハヴィ^{カハヴィ}を入れたり、俺様のシャツを畳んだりするんだ。するとだな、俺様はこの冴えた頭脳を、敵をやっつける方法を考えることだけに使える。しかも今日まで従卒をやった熟練兵は戦闘にまわってもらえる。どうだ、なかなか大切な役割だと思わないか？」

「でも、僕は戦いたくてここに来たんです」

ユーティライネンは頬を指先でポリと掻いた。

「そりゃまあ、そうでなきゃこんな所には来んだろうな」

「中隊長、僕に戦闘任務を下さい！」

「だがなあ、促成栽培のお前達に、敵と味方を間違えずに銃を撃つなんて高度なことが出来るのか？ 俺様はそいつがとても不安で夜も眠れなくなっちまいそうだぞ。頼むから味方の後ろ頭を撃つたりするなよ。コメディじゃないんだから、何しやがるって突っ込み入れて済むこっちゃないんだからな！」

「出来ますよ！」

セツポは胸を張って答え、クルツカも慌てて肯いた。

「そうか、そこまで言うなら試してやろう。お前達、あの目標に弾を当てることも出来るよな？」

ユーティライネン中隊長は、陣地の百メートルほど前方に広がる白樺の林を指さした。

「目標って、どれですか？」

「どれでもいい。あの白樺の枝をだな、ここからその銃で撃ち落として見せろ。それが出来たらまあ、配置を考えてやらんでもない」

ユーティライネン中隊長は銃を撃てるかとは尋ねなかった。

スオミの男に銃を扱えるかと問うことは、極東の島国に住まう民に箸を使えるかと問うようなものだからだ。出来るのが当たり前。従って、要求された技量は、百メートル先にある木の枝を弾丸で射落とせというものだった。

流石に難しいと少年は息を呑む。百メートル先の立木で、肉眼で確認出来る枝など太

いものばかりだ。そんな枝は、たとえ弾丸を命中させることが出来ても、落とすことは出来ない。

だが、クルツカは答えるよりも早く、伏せ撃ちの姿勢をとった。手袋を外すと、モシン・ナガンのコピーであるM二八／三〇小銃を構え、適切なのを選ぶ。

するとあたりで作業していた兵士達が手を止めた。

まさかユーティライネンの無理難題に挑戦しようとする新兵がいるとは思わなかったのだ。最初は無謀な挑戦だと揶揄する気持ちで眺めていた彼らだったが、作業の音が消えて周囲には重い静けさが満ちていく。空気が張り詰め、兵士達の背筋に冷気を浴びせられたような緊張が走った。

クルツカは軽く引き金に指をかけると、ぺろりと唇を舐めた。そして引き金を絞っていき——照準が合った瞬間に引く。

モシン・ナガンと、M二八／三〇の決定的な違いはその命中精度だろう。本家本元よりも民間防衛隊銃器製造株式会社（SAKO）製の方が造りが丁寧なのだ。そのうえに彼女に回ってきた銃は出来が良い部類に入るため、狙った場所に弾が行ってくれ、集弾率も良い。

瞬く間の早業で一発の弾丸が消費され、百メートル先の白樺から、降り積もった雪と

ともに枝が一本落ちる。

兵士達は一斉にどよめいた。

再び立ち上がったクルツカは、流れるような動作で積桿ごうかんを引いて排莢はいきようすると、そのまま直立不動の姿勢をとって「撃ちました」と復命した。

「ほうほうほう、なかなか凄い腕前だな。何処で誰に射撃を学んだ？」

ユーティライネン中隊長は、嬉しそうに破顔した。

「祖父からです。祖父はサーミ一番の獵師でした。今はあたしが一番です」
だからこんなことは朝飯前だ。スオミの男ならばこの一言で全てが理解出来るでしょう？

クルツカは、そんな意思を込めて言った。

中隊長はクルツカの顔つきや体軀をまじまじと見ると「おい、新兵」と呼びつけた。

「お前の名前は？」

「クルツク・サムライネンであります。中隊長殿！」

「女みたいに綺麗な顔立ちをしてやがるな。お前が男なのが惜しいくらいだぞ。恋人は故郷にいるか？ お前が死んだら、涙で集落が洪水になっちまうくらいに、泣く娘が大勢いるんじゃないだろうな？ 羨ましがらただけで怒らんから正直に言ってみろ！ どうだ、んー!?」

「そんなのいけません。祖父も死にました」

「ふむ、そうか。ならばお前を従卒にするのはやめてやろう。腕自慢のお前にちょうどいいところがある。ついてこい……」

ユーティライネンは、クルツカに命令した。

「ちゅ、中隊長殿。僕は!？」

セツポ少年が呼びかける。その声には、僕を置いてきぼりにしないという響きがあった。

「兵卒サボライネン。あその枝を一発で射落として見せろ。出来なきゃお前は俺の従卒だ」

ユーティライネン中隊長はそう命令すると、クルツカだけを引き連れて構築中の陣地から離れたのである。

丘の斜面を歩くことしばし。ユーティライネン中隊長は、陣地から少しばかり離れた場所ので、丸木小屋を建設している兵隊達に声をかけた。普通の建物と違って、地面に半分めり込んだ形になっている。

「おい、カルフ！ カルフ上曹はいるか？」

弾かれるように飛び出してきたのは上級軍曹の階級章を付けている男だった。のこぎ

りをほつぱり出して直立不動の姿勢で中隊長の前に立つ。

「はいっ、中隊長殿！ 御用ですか？」

「新進気鋭の補充兵を連れてきてやったぞ。お前のところで使え。レトネン少尉には俺様から話しておいてやる」

「はいっ！」

雪に身体半分埋もれてスコップを振っていた兵隊達は、その声に手を止めて顔を上げた。中隊長が直々に連れてきた新兵に興味があるのだろう。

「みんなよく聞け。この新兵はなかなかの腕自慢だぞ。本人に言わせると、サーミで一番なんだそうだ」

「つまりはスオミで一番ってことです」

クルツカの補足説明に、兵隊達は驚いた表情をした。そしてすぐに嘲る^{あざけ}ように笑った。何がおかしい？

古参兵達の反応にむかつ腹の立ったクルツカだったが、怒鳴り返すのはやめておいた。クルツカがその腕前を誇ると男達が鼻で笑うのは、今に始まったことではないからだ。

こうした連中を黙らせるには、結果をもって知らしめて行くしかない。これまでの彼女は自分を馬鹿にする連中を実力で黙らせて来た。これからもそうするだけである。

すると兵隊達もクルツカの態度に感じるところがあったのか、すぐに笑うのを止めた。

小生意気なガキが身のほど知らずに腕を自慢していると思ったのだが、嘲笑しても感情的になって怒り出さないところから、壮語を支えるだけの實力の持ち主であることを察する。張り子と違う本当の實力を持つ者は、他人に言葉で貶けなされたくらいでは、何とも思わないものなのだ。

すると中隊長は説明を付け加えた。

「お前達、聞いて驚け。この新兵はな、百メートル先の白樺の枝を初弾の一発で落として見せたぞ」

「おおっ！」

「俺様がこいつをここに連れてきたのは、そういう理由だ……そして兵卒クルック・サムライネン。お前もここで鼻っ柱をへし折られて自信を喪失するなよ」

「どういうことですか？」

「この本部小隊にはな、それぞれの小隊に配属させるには惜しい實力者ばかりを揃えているんだ。例えばだな……あの男を見ろ」

中隊長は、話に加わりうともせず黙々と塹壕を深く掘る作業に従事している小男を指さした。

クルツカは面食いではなかったが、その兵隊の容姿をお世辞にも端正とか、いい男と評することは出来なかった。女性として熟れてくれば「味わいのある顔だわ」と思う時

が来るかも知れない。だが、まだまだ小娘でしかないクルツカにとつて、男性の評価基準はどうしたって分かりやすい『美しさ』になってしまう。その意味で身長百六十センチに満たない男の容姿は、クルツカの好みからは大きく外れていたのだ。

「あいつの名前は、シモ・ヘイへ予備役兵長だ。これまでも数多の射撃大会に出場し、トロフィーを獲得してきた。この連隊、いやおそらくは第四軍随一の射手だ」

中隊長の贅辞が耳に入ったのか、その兵隊は不快そうに眉を寄せた。

年齢は三十ぐらいか？ 階級章は兵長のもをつけているからそれなりに軍隊生活が長いだろうが、いくら相手がパトタイマーの予備役中尉だからって、上官から褒められたのに不機嫌さをあからさまにしてしまうような態度は、クルツカの美意識に反していた。

「おい、シムナ。若い奴に負けるなよ。こいつは慣れて来るとそれなりに腕前を発揮するぞ」

「俺を抜かすぐらいの腕自慢なら、きつと楽しせてもらえるでしょう。助かります」

そうだけ答えて土木作業に戻ってしまう小男の態度は実に素っ気ないものであった。「相変わらず無口で謙虚な奴だ。謙虚過ぎるのが欠点とも言える」

ユーティライネン中隊長は、その他にも貴重な対戦車ライフルを担当するヤッコ兵長など、特別な技能を有する男達をクルツカに紹介していった。そしてクルツカを見下ろ

して「ふむ」と肩を竦める。

「俺様は威勢のいい奴が好きだ。もしお前が女だったら嫁にしたいぐらいだ。だがそれも実力を伴っていたら話だ。お前は他の奴にはなかなか出来ないことをやって、俺様を感じさせてくれたが、もうすぐ始まる実戦は立木の枝を落とすのとは訳が違う。何しろ立木は撃ち返してこないんだからな」

「はい」

「まずは生き残ることに専念しろ。お前がその目の良さを生かすのは、その後だ。いいな」ユーティライネンはそう言い聞かせてクルツカの小さな肩を叩いた。

些細なやり取りであったが、クルツカは中隊長の評価を「案外人を見る目あるじゃん」と思いつきり上げていた。クルツカの目の良さを正しく評価出来る男が並であるはずがないからだ。

「カルフ上曹。任せたぞ」

カルフ上曹は「分かりました」と右腕を上げて敬礼した。

「よし、決まった」

ユーティライネンはそう言うのと、クルツカを振り返る。

「言うことでお前は、俺様直属のこの本部小隊で戦え。メシの食い方から糞のひり出し方まで上曹にひつついて教えてもらうんだぞ。いいな」

言いたいことを言って颯爽と立ち去っていくその背中、見るからに上機嫌そうであった。

褒められたような気分になって気を良くしていたクルツカも、快活な気質の指揮官の下で働くのも悪くないように感じ始めている。要するに単純な娘なのだ。

さあ、仕事だ。いや任務だ。クルツカは指令を貰おうと振り返る。

だが見れば、兵隊達はスコップで穴を掘る作業に戻っていた。クルツカなどいないかのような扱いで一心不乱に作業をしている。敵が近づいて来ていることがわかつているから、寸刻の余裕もないのだろう。誰も彼もが必死で働いているのだと感じられた。とは言え自分は何をすればいい？

「あの………上曹？ 自分は何をしたらいいんですか？」

「まずは俺達の飯を貰ってこい」

するとカルフ上曹はクルツカに、ブリキのバケツを差し出して告げたのだった。

「信じられない！ 上曹ったら、あたしに雑用しかさせてくれないのよ……じゃなくて、くれないんだぜ！ 要するに雑用係ってことよ！」

食糧を受け取るために補給係のテントに向かったクルツカは、雑用を仰せつかつて走り回っているセツポを見つけるといきなり愚痴った。

だがセツポ少年はそんな悩みは贅沢だと切って捨てる。

「みんなピリピリしちゃって、僕達新兵どころじゃないんだよ。いちいち指図してもらうなんて無理だよ。仕事を見つけて自分からどんどん動かなきゃ」

「それは分かるけど」

「だいたい、クルックは贅沢だよ。敵が来れば戦えるんだから。僕なんか、これじゃあボーイスカウトの時と全然変わらないよ!」

スオミの国防はボランティアである民間防衛隊によって支えられている。民間防衛隊には徴兵年齢である十七歳に達していない少年が属する組織もあるのだが、そこではもっぱら兵站へいざん、伝令といった支援任務に就く。だがそれでは物足りないのか、年齢をこまかして兵役に志願する者もいて、セツポ少年もまたその一人のようであった。

セツポは背負っていた銃を手にすると嘆息した。そして銃に降り積もった雪に眉をひそめ、槓桿を握ってボルトを銃から引き抜くと、降り積もった雪を払うべく「ふうっ、ふうっ」と息を吹きかけた。

「僕もクルックみたいにこいつの腕前をもうちょっと磨いておけば良かったよなあ」

セツポ少年はサヴォンリンナ市の商家の育ちで、銃を手にする機会が農村育ちの少年よりも少なかったと言う。クルックも同情したが、こればかりはすぐにどうこう出来ることでもない。射撃はコツさえ得れば大抵の者はある程度まで腕を上げることが出来る

が、そのコツを得るまで気の遠くなるほどの練習を必要とするのだ。

「今からでも遅くないから、練習はしておきなさいよ」

「わかったよ。けどなんかむかつく。クルックの口ぶりはまるで母さんみたいだ」

母親の愛情を疎ましく思い始める年頃の少年は、クルックに恨めしそうな視線を向けた。クルックが自分に向ける視線が、母親が自分に向けるものとどこか似ていることをかぎ取ったのだろう。

「僕はもう子供じゃないんだ!」

「あんたねえ、そんなだから一言言いたくなるって分かってる?」

だがセツポは聞こえないとばかりに耳元で手を振ると、中隊長室に逃げるように去って行ってしまった。

「つたく。だからガキだつて言うの」

「ふん。お前も似たようなもんだろう?」

振り返ると炊事場の奥から恰幅かみの良い食糧係下級軍曹がやってきた。

「はい。あたしもまだまだです。だから色々、至らないところは教えて下さい」

「なるほど。謙虚だな」

「大人の中で鼻っ柱を折られながら育ちましたから」

猟師の大人達に交ざって小さいうちから働いていると、嫌でも大人という存在の凄さ

と頼り甲斐を実感し、自分がいかに至らないかを理解するようになる。クルツカの腕自慢がすれすれのあたりで増上慢にならずに済んだのは、そんな環境にあつて、射撃以外の分野で優れていたり、経験を積んだりした者に対して敬意を払うことを身につけていたからであろう。

だからこそ、周囲に敵ばかりつくったクルツカにも、友達と呼べる存在がいたのである。スヴィ、アニッタ、エーロ……クルツカの親友は皆、何かに秀でていて子供社会の中でも有力な存在だった。

クルツカの愛用しているミトンの手袋も、縫い物に長けたスヴィが作って贈ってくれたものだ。内張りにはクルツカが狩ってきた獲物の皮が使っており、表面には雪の結晶が刺繍されたかなり凝った代物だ。しかもミトンのくせに、右手の人差し指だけは独立させてある。微妙な引き金操作の邪魔にならないよう、射撃時に人差し指の先を露出させられるようにもなっている。

食糧係軍曹はクルツカの前に「こいつを持って行け」とバケツや箱を置いた。

バケツには茹でた黒ソーセイ^{ムスタマ、カラ}ジが山盛りになっている。それに缶詰と石みたいに硬いクラッカーが食事であつた。クルツカは小山のような食糧を落とさないように、ふらふらとした足取りで作業現場に戻った。だがどうしたことか、そこにはカルフ上曹どころか本部小隊員達の姿すらなかった。

「あれ？」

みんな用足しにでも出かけたかな？

周囲を何度も見渡して、誰もいないことを確認する。

チャンス！

バケツを弾薬箱の上に置くと、クルツカは荷物を抱えて構築途中の掩蔽壕^{えんぺいごう}に潜り込んだ。

暗がりに身を隠し、あたりに注意を払いながら上衣を脱いでいく。そして下着のさらに下に巻き付けていた包帯を解いていった。

若い娘のつるんとした素肌が冷たい風に曝されてたちまち鳥肌が立つ。だがクルツカは寒さに震えるよりも、久々の解放感に首肩の凝りを解きほぐしてホッとため息をついた。

「いい加減、取り替えたかったのよね」

男所帯の中にいると独りになる機会はなかなか巡ってこない。新兵の訓練キャンプではクルツカはわずかな隙を突いて清潔を維持する習慣を身につけていた。

身体をぬぐって、新しい包帯を胸に巻いていく。

すると突如として「そこにいるのは誰だ！」という声が投げかけられてクルツカは悲鳴を上げた。

「ぎゃああっ！」

振り返ればそこに訝しげな顔つきをしたヘイへ兵長が立っていた。

「み、見た!?」

クルツカの刺すような視線に、ヘイへ兵長はまるで関心がないかのごとく返した。

「いつまでサボってる新兵? 作業はもう始まっているぞ」

どうやら間一髪で見られずに済んだらしい。暗がりになっていたのが幸いしたのかも知れない。クルツカは安堵のため息をつくど慌てて上衣の襟のボタンを留めて返事した。

「あ、はい」

大急ぎで服装を点検して外へと飛び出す。すると小隊の皆はどこから現れたのか再び作業をしていた。どうやら切り倒した大木を運んでいたようで、今はその樹皮をむいている。

これを掘った塹壕の上に並べて土を盛り、対砲爆撃用の掩蔽壕にしようとしているのだ。

監督しているカルフ上曹にクルツカは食事を貰ってきたと報告した。

「おおつ、よし! 野郎共、飯だ。交代で食え!」

カルフ上曹は、兵士達に食事を取るように指示した。

数名の兵士が湯気を上げている黒ソーセージをむさぼる。

その間に、クルツカは雪に刺しっ放しにされていたスコップを手にとると、塹壕を広げる作業をすることにした。

スコップをまだ柔らかい雪に突き立てて掘り下げていくとやがて土の層に達する。たちまち腕が重くなって、疲れが腰や足にまで広がっていった。だがこれで音を上げては何のために戦場に出てきたのか分からなくなってしまう。頑張つて硬い土を割り、重い土砂をぐいっと持ち上げ、ぼいっと放り捨てる。するとそこで声をかけられた。

振り返ると、カルフ上曹が不機嫌そうな表情で立っていた。

「何をしてる?」

「な、何って、塹壕の構築作業をしています」

叱責の気配を感じて思わずたじろぐクルツカ。

カルフ上曹が白い雪の上に放り出された黒い土を一つずつ摘んで拾い始めると、クルツカはようやく上曹が何を言いたいのかが理解出来た。

「あ!」

周囲は樹も大地も悉くが雪の白色に被われている。だがその表面に投げ出された土によって、クルツカが掘ったあたりだけが酷く目立っていたのである。

クルツカは言い訳のように釈明した。

「上曹。そんなことしなくても降ってくる雪に覆われて、すぐに分からなくなりますよ」

こうしている今も雪はどんどん降り積もっているのだ。油断すれば頭や肩にまで積もってしまうほどである。ちよつとぐらい雪を汚しても、すぐに見えなくなってしまうはずであった。だがカルフ上曹は不機嫌そうな表情のまま、雪から土の粒を取り除きながら、声を押し殺すように言った。

「戦争はもう始まっているんだぞ新兵。敵が今、この瞬間に来たらどうする？」

そう言われると言いつのしようがない。今、この瞬間に敵の攻撃を受けたとしたら、黒い土で目立つこの塹壕は集中的に狙われることになるのだ。

「……」

「よく考える。塹壕が敵から見えないように工夫しろ。命に関わるんだからな」

『獲物がどう動こうとしているのかを、よく考えて工夫しなさい』

上曹の言葉が尊敬する祖父の教えに微妙に重なった。そんなこともあってか、クルツカも言い返したりせず「はあい」と答えて掘開作業に戻った。

「でも、土はどこに棄てたらいいんですか？」

「基礎訓練課程で習わなかったのか？ 掘開した土は塹壕の敵側に積み上げ平らに均し、その上から雪を被せておくんだ」

「そうだった。雪で隠せばいいんだった」

クルツカは、ど忘れしてましたとばかりにぺろっと舌を出すと、スコップの尖端を大

地に突き刺した。

† 死闘の始まり。「撃つ」ということ

ニューヴォスト連邦^{リット}、すなわちヴェナヤ軍の第五十六狙撃兵師団の先鋒部隊がコッラー川の東岸に到達したのは、十二月七日（木）のことである。

ヴェナヤ軍の先遣部隊は、戦車を先頭に押し立て歩兵部隊が続くという形で、国道を西に進みコッラー川に架かった橋を渡った。

「敵が来た！ 敵がついに来た！」

前哨陣地からの電話が警告の声をがなり立てると、猛烈な砲撃と空襲がスオミの防御陣地を襲ったのはほぼ同時である。

空気を切り裂く砲弾の落下音が兵士達の神経を削り、腹の底に響く爆音が地面を揺する。森の木々がメリメリと音を立てながら倒れていき、工事現場さながらに木屑をまき散らす。

爆炎とともに巻き上げられた氷と土が頭上から雹^{ひょう}のように降り注いで、白い雪は瞬間にどす黒く染まり、クルツカが心血を注ぎあげて純白を維持した塹壕も、黒と白が入

り乱れる色彩へと塗り替えられてしまった。クルツカは、土に汚れた偽装服をはためかせながら、爆風に吹き飛ばされないようヘルメットを押さえ、塹壕の狭い通路をカルフ上曹の背中を追いかけるようにして走った。

「いよいよ来たわね。あたしが目に物見せてやるんだから」

「勇ましいな、クルツク！」

「当然でしょ！ 何しろスオミで一番の獵師がここにいるんですから。任せておけてもんです」

クルツカの^{たいげんどうご}大言壮語は、砲爆撃の嵐の中でも疎むことなく健在である。幼少の頃のような非合理的な思考——例えば「腕自慢をしていれば、冬の女王の迎えが来る」といった考え方をしていたことは既に忘れていたが、その時の癖はしっかりと根を張り、クルツカの人柄の重要な部分となっていたのだ。そして、彼女の壮語癖は兵達の耳には小気味よく響き、砲爆撃の暴力的な破壊力に疎む兵士達の精神に戦闘意欲を^{よめい}蘇らせた。

「よっしゃ、ならいっちょルツシャ共にかましてやろうじゃないか！」

「おおっ！」

砲弾が飛び込んできた時に被害が広がることがを防ぐために、塹壕は決して真っ直ぐには掘らず、適当な距離でクランク屈折を設けている。そのため、何度も何度も折れ曲がる必要がある。

クルツカがいくつ目の角を曲がった途端に、砲弾が塹壕内に着弾した。

彼女の後ろを走っていた兵士が吹き飛ばされた。たちまち仲間が救い出して後送していく。本部小隊の兵士達は、壕内を吹き抜けて来る爆風を背中に浴びながら走り続けた。右折して左折して、またまた右折して——クルツカは叫ぶ。

「まるで、ネズミになった気分よ！」

戦闘に高揚しているのか、叫ぶ声はどこか調子外れだ。ついでに言えばさつきから言葉遣いも隠せていない。だが爆音轟く戦場の興奮が兵士達にそんな違和感を忘れさせた。「ネズミのほうがもつと速いぞクルツク。走れ走れ！」

背後の兵士に煽られるようにして、クルツカは片手で地面を擦ることが出来るほどに姿勢を低くしながら塹壕を走り続けた。

配置につくと胸土から上体を持ち出して敵の方角を見ようとす。だが、ヘイへ兵長に引きずり倒され、頭を押さえ込まれてしまう。ヘイへ兵長自身も荒れ狂う爆風と破片から逃れるため、クルツカの背中に覆い被さるようにして伏せた。

「まだ頭を出すなっ！」

耳元で怒鳴られたクルツカはその理不尽な振る舞いに腹を立てたものの、頭を押さえ続けられたために、言い返すことも出来ないでいる。

「お前達、知っているか？ 弾丸や砲弾の類は礼儀正しい奴が大嫌いなんだ！ だから

頭を低くして地面に額をこすりつける！ 深々とお辞儀して迎えるんだ！ そうすりや向こうの方が勝手に避けてくれる！ 五体投地するぐらいがちょうどいい！」

自分は銃弾や砲弾から嫌われているという自信があるのか、ユーティライネンの親父は胸を張って堂々と立った姿で兵達に頭を下げると怒鳴り散らしていた。

砲弾が集中して降り注いだために雪の層が吹き飛び、土の層があちこちで露呈している。それでもなおヴェエナや軍が執拗に砲撃を続けたため、コッラーの森は最早森とは呼べない様相に変わり果てていた。第六中隊隊員達の隠れる塹壕も縁が崩れ、降り注ぐ土砂によって底が埋まり、その形状を失っていた。

運悪く爆風に吹き飛ばされた兵士は、仲間に手当をされて後方へと運ばれていく。

だが兵士達のほとんどは半身を土砂に埋められながら、吹き荒れる鉄の暴風が止むのをひたすら耐えて待ち続けたのである。

「来たぞ！」

不意に砲撃が止んで、それまでの轟音がなかったかのように静まり返る。

鼻をつく刺激的な爆薬の臭いがあたりを満たし、喉の奥が刺激されて嘔せ返る。舞い上がった埃と煙があたりを満たして視界を覆う中、風の切れ目からかすかに見えるコッラー川を、スオミの兵士達は指さした。

「ヴェエナや兵が川を渡ってくるぞ！」

「総員、射撃用意！」

スオミ兵達はそれぞれ銃を敵へと向けた。

「ぶはっ！」

地面に押さえつけられていたクルッカもようやく解放され、黒い土と泥に塗れた顔を上げた。だが次は、胸一杯に吸い込んでしまった煙や埃で、何度も咳き込むこととなった。しばらくの間、呼吸を整えるためにげいげいと肩で息をする。

呼吸がようやく整うとクルッカはヘイヘに対して抗議の声を上げた。

「兵長！ あ、あたっ……あたしを窒息させるつもりですかっ!？」

だがヘイヘ兵長はクルッカの疑問に答えようとせず、銃から土を払うと胸土に身体を押しつけて銃を構えた。彼のすさまじい集中力はすでに敵へと向けられているのだ。あたかも自分が無視されているように感じたクルッカは、ヘイヘ兵長の評価を最低にまで下げていた。

「くっ！ 嫌な奴う」

とは言え敵が来る。見渡せば他の兵士達も、コッラー川の方角を睨んで息を吞んでいる。橋を渡って戦車と歩兵の群れが近づいて来ていた。

それは白い大地を埋め尽くす黒い蟻の大群のようにも見えた。